

沼津市若山牧水記念館

第36号

2006.3.15

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

吉次君に寄す

かみつけの

とねの郡の

老神の

時雨ふる

朝を別れ

ゆくなり

大正十一年十月廿六日

旅人牧水

酔 牧

なほ書きつける一首

相別れ

われは東に

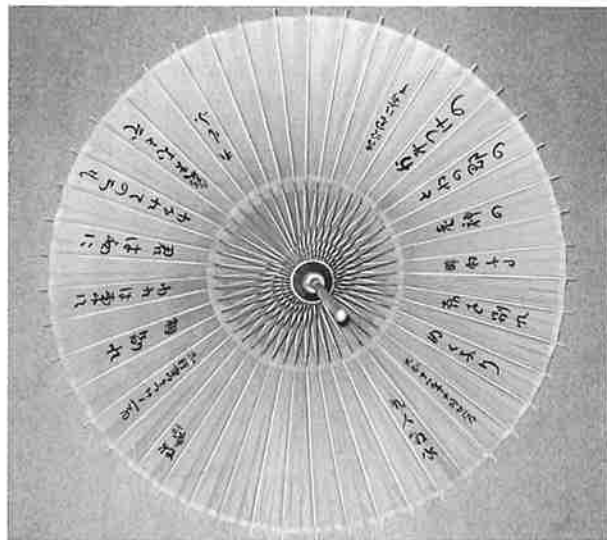
君は西に

わかれてのちも

飲まむとぞ

おもふ

牧水記念館の展示室を回っていくと左上の壁に番傘が一本飾られている。よく見ると、その番傘には右の二首の歌が書かれていることに気づかれるだろう。吉次とは、塩原太助の生地「下新田」の生方吉次である。牧水の熱烈なファンで、沼田に出掛けていたが、牧水が来たと聞いて、沼田の薬局の息子で画家の生方誠とともに、月夜野、猿ヶ京を越えてはるばる法師温泉まで来たのだった。ちなみに、生方誠は、後に



歌人生方たつとと一緒にあった人である。

沼田から法師温泉までは、車で走っても結構な時間がかかる距離で、三〇キロ弱ほどか。しかも、猿ヶ京の北、西川に沿う道は現在でも細い山道が六キロほど続く。その道を夜にもめげず歩く青年たちの牧水を慕う想いには驚嘆するものがある。吉次たちは、一升瓶とともに歌集『くろ土』を持っていた。

牧水は『みなかみ紀行』の中で、

懐中から私の最近に著した歌集『くろ土』を取り出してその口絵の肖像と私を見比べながら、矢張り本物に違ひはありませんねエ。」と云つて、驚くほど大きな声で笑つた。

と書いている。大正十一年十月二十二日のことである。牧水は、法師温泉長寿館から次の日には三国街道沿いの湯宿に、更に沼田の青池屋に泊まり、二十五日には老神温泉に至るのだ。吉次は老神まで牧水に従うのだが、番傘のエピソードはこの老神温泉での出来事である。出立の朝は別れの朝でもあった。雨が降っていたので、吉次は番傘を求めに走り、しかし雨が止んで、牧水は別れの記念にその傘に歌を書いたのである。

牧水記念館の傘はレプリカである。この傘の歌碑がある沼田の舒林寺にも、そして法師温泉にもレプリカしかなかった。沼田の生方家にも尋ねたが、現物の所在は確かめられず、風の便りでは、本物は仕舞っている間に傘が開かなくなり廃棄したと聞こえて来た。果たしてどうか。もしかしたらどこかに現存しているのではないかと願っている。

牧水記念館に入られたら是非、このエピソードとともに傘を仰いで欲しい。
(須永秀生)

牧水直筆の短冊が寄贈される

瀬戸内海の小さな島、香川県直島なおしまの牧水歌碑を「新発見だ」と思い込んだ林茂樹なほしき本会理事長と大澤敏夫沼津市教育委員会文化振興課長が理事長の大学時代の友人で直島出身の河野健氏の案内で直島まで出掛けた折の頭末は、「館報」第三〇号に詳しいが、波が静かに寄せる砂浜に面して建てられた歌碑は見事で、碑石の側面に牧水が暗唱していたボードレールの詩が刻まれた珍しいものだった。

大正一〇年五月直島を訪れた牧水は、島の神官三宅其部氏の案内で鯛網見物に出掛け、浜で開かれた酒宴で即興の歌三首を色紙と短冊に、日頃愛唱していたボードレールの『悪の華』の詩の一節「旅」を短冊に書き残したのだった。三宅氏の長男親連ちかひつぐ氏が町長をつとめていた昭和五一年に建立された歌碑には、牧水が直島で詠んだ歌一首が刻まれ、側面には、このボードレールの詩が刻まれた。

林理事長等が島を訪れた際、河野氏の兄で、島に住む片岡健夫氏の案内により三宅家を訪問し、故三宅親連氏の夫人晃子あきこ氏から八〇年前の牧水直筆の色紙や短冊を拝見させていただいた。いずれも大切に保管され、とりわけ、ボードレールの詩の書かれた短冊には感動したが、貴重

な資料の永続的な保存については気になるところであった。そこで、この短冊が沼津市若山牧水記念館において保管されることによつて散逸を防ぐことができるのではないかと願っていた。

同じ思いをもつた片岡氏は、二回にわたり沼津を訪れ、沼津市若山牧水記念館を見学して、ここなら、短冊の保管を安心して委ねることができると確信された。

片岡氏のご尽力の甲斐もあつて、三宅晃子氏は、ボードレールの詩が書かれた牧水直筆の短冊を社団法人沼津牧水会に寄贈することを決断され、昨年一月二〇日、片岡氏と故三宅氏の町長時代の片腕で元助役の浜口勝氏を伴い、当地を訪れた。

贈呈式は、沼津市若山牧水記念館で行われたが、三宅晃子氏は、「八〇年余り大切にしてきましたが、自宅で眠っているより素晴らしい施設

で管理してもらい、愛好家の方々に見ていただきたいと考えました。短冊も安住の地を得て牧水も喜んでいることでしょう」と語られた。



贈呈式 (左から 浜口勝氏、三宅晃子氏、林理事長)



ゆかむがためにゆくものこそ まことの旅人なれ 心は気球の如くにかろく 身は悪運の手より逃れえず なるの故とも知らずして たゞゆかむかなくと叫ぶ

第十六回

中学生短歌コンクールについて

恒例となった中学生短歌コンクールは、十六回を迎え、十月十六日の「沼津牧水祭・碑前祭」当日、特選歌の表彰式を行い、特選歌・入選歌の短冊が同日から十月三十日まで牧水記念館ラウンジに展示された。また、その後、第二回沼津文学祭に協賛して、沼津市民文化センターのロビーにも展示された。

特選歌は、次の十首である。

歩くとこ人がたくさんうめいてる八月六日八時

十五分 第五中三年 中島麻沙恵

かあさんに良く似てるねと言う祖母の笑った顔

は母にそっくり 浮島中三年 手塚亜純

路地裏に幕末の風ふきぬける昔と今が交差する

町 第五中三年 剣持拓也

悲シミヲ流シテクレル気ガシテサ僕ハヒトリ

雨 二ウタレル 原中二年 西山まい

雨上がり傘をたたためば青空が夢いっぱい広がつている

大平中二年 小松美晴

抜け殻は離れることなく葉に付いて「生まれたんだ。」と呼びかけている

今沢中二年 加藤綾香

「はいどうぞ」母の作ったカフェオレに私の心

と口元ゆるむ 門池中二年 友岡麻美

失恋とかそういうわけじゃないけれど明日は髪

を切りに行きたい 暁秀中三年 山口詩歩

スマッシュを打つと斜めにまっしぐら台にささ

ったオレンジの球 第三中二年 秋山翔

私には解けないものと思いきみ解けるものまで解かずに終わる 大岡中二年 石川絵美子

これらの作品について、選者の一人として気付いたことは、それぞれの中学生作品らしい巧い短歌に出合えたことである。でも、巧いという私の感想には二通りある。一つは、中身のしっかりとした巧さであり、もう一つは表現技巧の巧い作ということになるうか。そこで、まず前者から寸評を述べると、
「歩くとこの」の作品であるが、これは結句の「八月六日八時十五分」で広島原爆投下の悲惨な状況をしつかり感性で受けとめた作品になった。中学生ながら日本の戦後六十年に對する平和への願いを誘う重い作品であることに感心した。

《路地裏に》の作品も、修学旅行作品と思われるが、京都又は秋市のように幕末の歴史を彷彿とさせる読みの深い作品である。これも「昔と今が交差する町」の結句が決つた。そして、これにつづく、かあさんに、雨上がり、はいどうぞ、スマッシュを、

私にはの作品は、それぞれが自分の言葉で日常生活の中から感覚的に詩を拾い上げ、内容技巧を共にした巧い歌で、入賞を機に短歌を大いに作つてほしいと期待したい作者たちである。



次に表現の上手な作品は、《悲シミヲ》、《抜け殻は》、《失恋とか》の三人の作品ということになるが、どの作品もつばを心得た技巧とリズムカルな表現力に注目する。なかでも、《悲シミヲ》の作品であるが、一句から五句まで主語を漢字にして、述語をカタカナで表記するという、とても初心者とは思えない作法に驚いた。だが、このカタカナ表記で少し気がかりになったのは、同校の他の作品で選には採れなかったが、「ワンワンワン・・・」「ウホホホウホホホホホ・・・」と各語句をカタカナで繰り返す三十一音の作があつて、これはどうしたことかと思われる。現代短歌には多様な表現法があつて、オノ

マトベ（擬音）の手法もあるが、このような主題不明の作品はだめ。短歌はゲーム遊びではないので注意したい。

《抜け殻は》、《失恋とか》の作品は文句なく巧い作品で、作者の対象物に据えた視点から作者の意志と細やかな情感が調べられている技巧派作品となつた。

終わりに、総論的に述べると、今回の選歌で特に感じたことは、応募総数一、四三三首でその数については定着しているが、市内の中学校別に見ると応募数に大差があり、最高は四〇二首、最低は二首という学校もあつて、これはどういうことなのか、応募取り組み意識の問題だろうと申し上げておきたい。（曾根耕一）

第一〇回若山牧水賞に 水原紫苑氏の歌集『あかるたへ』

若山牧水賞運営委員会（宮崎県、宮崎県教育委員会、宮崎日日新聞社、延岡市、東郷町で構成）による第一〇回「若山牧水賞」の受賞作品は、水原紫苑氏の『あかるたへ』（河出書房新社刊）に決り、一月二九日（日）宮崎市の宮崎観光ホテルで授賞式が行われた。式後、若山牧水賞選考特別顧問の大岡信氏による「牧水―新雑誌への熱望」と題する記念講演に続いて、若山牧水賞創設一〇周年を記念して「牧水と現代―これまでの牧水・これからの牧水」と題するシンポジウムが行われ、榎本篁子当館館長がパネリストとして出席した。翌三〇日（月）には、水原紫苑氏による受賞記念講演「牧水のしらべ」が、延岡市内の野口記念館で催された。

水原紫苑氏は、昭和三四年神奈川県に生まれ、早大大学院仏文学専攻修士課程を修了。昭和六一年「短歌」に入会。平成二年に歌集『びあなか』で第三四回現代歌人協会賞を受賞。平成一年歌集『客人（まらうど）』で第一回駿河梅花文学賞、平成一二年に歌



写真提供 宮崎日日新聞社

集『くわんおん（観音）』で第一〇回河野愛子賞をそれぞれ受賞。歌集に『うたうら』『いろせ』『世阿弥の墓』、エッセイ集に『星の肉体』『空ぞ忘れぬ』『うたものがたり』『京都うたものがたり』がある。『あかるたへ』は、水原氏にとつて七番目の歌集。受賞発表の席で、「写真でなく、幻想的なよみ方で現実をとらえた」と評された。

『あかるたへ』は、古代の祝詞に出て来る言葉で、輝かしい明るさを表し、師の春日井建が好んだ。師の病気の快癒を祈る気持ちを込めて題名に選んだという。しかし、祈りもむなしく、平成一六年五月に春日井氏は亡くなった。「悲しく、悔しい思いです。（中略）まことにつたないながら、先生の詩精神を大切にしてくつもりです。」と、歌集『あかるたへ』のあとがきに記している。

以下、作者自選作品の中から五首。

流れゆくわたくし浅き川なるに中之島もてり子らは遊べよ

さくらさくら桜わだつみ漕ぎいでて西行く人に逢ふよしもがな

国家幻想破れむ日より一管のまさしき笛とならむ短歌か

松風のころろはたれも知るものをうつそみゆるゑに言ひあへぬかも

みいのちの際に想ほす色ふかみわがスカーフの紫を言ひます

◆新刊紹介◆



当記念館館長榎本篁子氏の夫で麻酔科医の榎本尚美氏により、平成八年に刊行された『若山牧水歌碑インデックス』は、他に類をみない労作であったが、その後、さらに調査研究を重ね、昨年、牧水生誕一二〇年を記念して『改訂版』が上梓された。

平成八年当時から一〇〇基以上も増え、全国で二八九基になった牧水歌碑を都道府県別・建立順に取り上げ、歌碑関連の情報や歴史的背景、歌碑の分布や建立時期、碑に刻まれた歌の題材に関する統計などの詳しい解説が載っている。様々な歌碑の写真が随所にあつて目で楽しむこともできる上、インフォメーション、サイドビューの項は単なる資料に止まらず、著者ならではの温かい配慮に満ちている。榎本館長の随想、式典での挨拶も紹介されていて、今回の『改訂版』はご夫妻の共著となっている。牧水ファンにはうれしい一冊だ。当館売店で取り扱ひ中。定価一九〇〇円。